令和７年度町政懇談会議事録（観光物産協会）

１　日　時　　令和７年10月14日（火）18：00～19：00
２　場　所　　役場
３　出席者（役場）　隈崎町長、中村課長、作井
４　出席者　　観光物産協会会長・理事等

５　懇談会要旨

新体制となった協会側から、観光振興の方向性の明確化や、客観的なデータに基づいた施策立案の重要性が提言。また、認定されたばかりの日本ジオパークを核とした地域活性化や、加工センターの拠点化、公式キャラクター「よろこびと」の活用など、具体的なブランド戦略が議論。

町側からは、農業中心の町づくりと観光の調和を重視しつつ、民間からの自発的な提案を予算化などで支援する姿勢を示す。

全体を通して、行政と民間が共通の認識を持って島独自の魅力を発信し、持続可能な経済発展を目指す。

観光物産振興の基本方針とデータ活用

＊ 協会の要望：町が観光物産振興やデータ活用をどう捉えているかという基本方針を知りたい。現状、農業・建設業以外の商工経済データが不足しており、施策立案が難しい。協会としては、フェリー・航空機の乗客数やふるさと納税の返礼品の経済波及効果などのデータを会員で共有し、月次での情報発信を強化したいと考えている。

＊ 町長の回答：提示された資料にある「基本方針・問題点・改善要望」こそが、観光物産協会の使命と役割そのものである。かつては行政が主導してデータ収集を行っていたが、現在は協会自身がこうした認識を持って取り組むことを心強く思う。行政としても予算化を含め、役割分担を明確にしていきたい。

観光の定義とジオパークの役割

＊ 意見：看板設置やPR動画など個別の動きはあるが、点と点が線や面になっておらず、観光の方向性が整理されていない。町の軸に沿って活動したいが、町長はどう考えているか。

＊ 町長：かつてのバブル期の開発失敗を教訓に、大規模開発ではなく「自然を残し、農産物やオーガニックを活かした景観や食」を重視している。ジオパークは、島の成り立ちや地質を学び、それを物産や観光（見る・食べる）に結びつけるための「旗印」である。

＊ 企画観光課：喜界島は輸送手段に限りがあるため、爆発的なオーバーツーリズムは起こりにくいが、奄美群島世界自然遺産登録による波及効果を狙い、「リピーターの多い島」としての認知度を上げたい。滞在型観光（滞在日数の増加）を目指している。

賃金上昇と雇用問題

＊ 意見：最低賃金の上昇（時給 1,000 円超、将来的な 1,500 円への展望）は、中小企業にとって死活問題である。人件費負担により新規採用が難しくなり、地域衰退が加速する懸念がある。

＊ 町の回答：国の情勢に合わせるしかないが、特定事業共同組合（マルチワーカー事業）など、国・県の補助を活用してスポット的な雇用を支援する仕組みをスモールスタートさせている。こうした施策の利用を検討してほしい。

加工センターの拠点化と情報発信

＊ 提案：町の加工センターを、一事業者の運営に任せるだけでなく、観光案内や物産展示の拠点（ここに来れば島のことが全てわかる場所）にすべきではないか。若手事業者の商品も積極的に紹介してほしい。

＊ 町の回答：管理している農業振興課とも共有する。空いているカフェ部分の公募も予定しており、観光案内機能の集約については、空港近くへの設置構想も含め、本気度を持って検討したい。

芸能文化とキャラクターの活用

＊ 提案：島の文化継承と教育のため、定期的な「ジオパーク祭り」を開催し、サンゴ研究所や高校生の研究発表、伝統芸能の披露を行う場を作りたい。また、町のキャラクター「よろこびと」のロゴデータをもっと自由に事業者が使えるよう、ガイドラインを緩和してほしい。

＊ 町の回答：文化を歴史として残すことが観光にも繋がる。キャラクター活用については、申請の手続きや目的の制限（営利目的の可否など）を整理し、より使いやすくするための条例やルールの見直しを検討する。

結び

最後に、会長より「ジオパークを経済活性化に活かすため、農と食を中心としたブランディングへの支援をお願いしたい」との要望があり、町側からも「初めて観光に光が差し込んだような会だった」と、今後の継続的な対話への期待が述べられ、会は締めくくられた。